Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2004.11
発行者：中島秀雄
事務局：東京都三鷹市井の頭 1-27-22 畑文夫
編集部：横浜市港北区日吉本町 6-36-20 荒井崇

NO.29

CONTENTS

・ ギャラリーイシスでの展覧会
・ 三好耕三氏講演会
・ ゾーンシステム テクニカルアドバイス
　　スロッシャーを使ってみて
・ 静物撮影会報告
・ ゾーンシステム研究会定例会日誌
・ インフォメーション

ギャラリーイシス中島先生講演会にて

ギャラリーイシスでの展覧会

中島秀雄

とにかく暑い京都だった。ギャラリーに向かって歩くだけで汗が吹き出てきた。
私は、以前から京都で展覧会をやってみたいと思っていた。京都にはシリアスなギャラリーがいくつかあることは分かっていたが、個展を開くまでにはいたらなかった。昨年の展覧会“ゴーストタウン・ボーディ”の会場に写真家の石山氏が突然現れたことがギャラリーイシスを具体的に知るきっかけになった。石山氏によると過去に多くのシリアスな写真家が展覧会を開催し、栗田紘一郎氏もその一人だと言っていた。石山氏の積極的な推薦が私を強く押し出した。個展が終わり、私は早速プレゼンテーションのための資料を整理し、写真にたいする考え方を文章にしてギャラリーに送った。返事はすぐにはこなかったが２週間ほどして連絡があり、3 月に京都造形芸術大学での打ち合わせのため京都に行くことになっていて、その折にそちらに出向く話をした。

３月の京都はまだ寒く地下鉄を出るとコートが必要だった。ギャラリーのあるここ北山駅はＪＲ京都駅から北へ地下鉄烏丸線に乗って１５分のところにある。周囲には府立植物園、コンサートホール、ノートルダム大学、府立大学があり、その背後には高級住宅街が広がる閑静な場所になっている。

ギャラリーは横断歩道を渡ったすぐのところにあった。コンクリートの外壁に鉄骨が組み込まれ、グリーンとバイオレットの色が付いたポストモダンな建物は京都のイメージと違っていた。かつて建築家の高松次郎は京都の町並みに多くのポストモダンな建築を建て注目されていたが、この建物もその亜流かと思った。後で知ったが、これも高松次郎の設計だった。

ギャラリーには女性の笑い声が響き、グラスをかたむける音や話し声で賑やかだった。フランス人による展覧会オープニングパーティーの最中で、女性の振袖姿が目立ち、このときばかりはさすがに京都らしさに目を見張った。しかし、話しの中に入って行くとフランス語の教師に会うためにわざわざ東京からやってきたということだった。

ディレクターでもありフラワーデザイナーでもある柿本ゆきこさんに案内され、大きなテーブルのある部屋に通された。展覧会期日、ワークショップやレクチャーのプランはすぐに決まり少し拍子抜けしてしまったが、企画展で開けることに正直うれしい気持ちだった。フローリングの床と白に塗られた壁面、広い展示スペースは写真専門のギャラリーとして充分なものを感じ、これほどのギャラリーは東京ではＰＧＩしかないだろと思った。

ギャラリーイシスは９３年に建築家の相川佳久雄さんが写真専門のギャラリーとして開いたもので、内外を問わず選れた作家の展覧会を開催すると同時に、若い作家の紹介も精力的に行ってきたようだ。また、ギャラリーの重要な役割の一つとして写真の保存並びに展示に関する情報提

供、ワークショップやレクチャー等もアートとしての写真への理解や関心を深めてもらうきっかけとするため、定期的に開催しているという。ギャラリーの趣旨は私と共通で、早く展示してその効果を実感してみたい気持ちが強くこみ上げてきた。

ギャラリーには私の作品に合うフレームが無く、フレーム、アクリル板、バックボードのすべてをこちらから送らなければならなかった。地方で展覧会をやることの大変さを改めて感じることになった。

展示準備のため、私はオープンの一週間前にギャラリーに出向いて作業を行った。このとき、研究会京都会員の本田さんに手伝いをお願いした。本田さんは私が譲った８ｘ１０の引き伸ばし機をもっていて、最近カメラを購入し、引き伸ばしレンズも手に入れようやく８ｘ１０撮影にめどが付いたと語っていた。

レクチャーには３０人ほどの人が集まり、不足する椅子をレストランから借りてくることになった。今回のレクチャーは有料になっていて、受講者の集まりは大いに気になっていた。数日前の電話では７人の申し込みでしかなかったが、大阪から数人、京都芸術大学から学生が２人、他は写真家、一般の写真に興味を持つ人達の集まりになった。当初はワークショップを予定していたが、暗室の問題がクリヤーできず、人の集まりも限られたものでしかないということでレクチャーだけになった。参加者の表情は一応に固く、私も最初は緊張を強いられたが受講者の表情は次第にほぐれ、予定時間をオーバーしてしまった。レクチャーが終わりレセプションに移った時点で２０冊用意したゾーンシステムの本はすべて売れてしまった。ゾーンシステムに初めてふれたという人がほとんどで、その論理や大型カメラにも強い興味を示してくれたことは大変うれしかった。

京都でのトレンドな表現はピンホールカメラだという。かつて東京で流行ったものが少しずれてこちらに来ているものと思った。当ギャラリーもピンホールカメラの生み出すプリミティブな表現に興味と関心を持ち、オリジナルピンホールカメラ３タイプを販売し、ワークショップも年に２回ほど開催し、作品展示も行っている。

ピンホールカメラの操作や表現には、オートマチックカメラやデジタルといったメカニックなものにはない原初的な操作と手作りのやわらかさが多くの人々に受けるのだろう。しかし、ピンホールカメラで撮影した作品なるものは撮影者の気分や心の楽しみがあり、あまりにも情報量の希薄なイメージに、第三者が見ても感動することはめったにないと私は思っている。

展覧会も後半、オープニングレセプションに４０人ほどの人の入りがあったが、記帳ノートを見てもせいぜい５～10 人／日　程度の来客だったようで、それを見たときは複雑な気持ちだった。ときより現れる来訪者に話しかけても、作品の内容が現代の京都に合わないといったネガティーブな意見は誰からも聞くことは無かった。始めてみる米国ゴールドラッシュの光景に大いに興味を示し、大型カメラが生み出す豊かなトーンとシャープネスに感動する声が数人から聞こえ、これ

から４ｘ５をやりますと言い出す若者も現れた。あえて言えば、もう少し大きいプリントがいいと言う声はあった。しかし、プリントコレクションの話になるとまったく取り付く島がなく、写真は見るものでコレクションするという概念はほとんど感じられなかった。

かつて、京セラの創設者稲盛和夫氏はシカゴにあるギルバートギャラリーの子息から多くの作品を買い上げ、作品のすべてを京都国立近代美術館に寄贈したことがあった。そのことが東京で大きな話題になり、私は展覧会をわざわざ見にいったことがある。写真の発明家タルボットやダゲールの初期の作品から湿板写真、ガラス乾板によって撮られた作品、現代アートの作品に至るまでその量は膨大であった。ギルバート氏がいうには日本には掛け軸の習慣があり、掛け軸に代わって写真が展示されることを願っているといったことが書かれていた。いったいその願いは叶えられたのだろうか。

今回の展覧会のために私は京都に５往復した。これだけではたいしたことは分からないが、印象に残った京都について文章にしてみた。

京都駅に降り立ち、建築家の原廣司が設計した京都駅を始めて眺めた。デザインが京都の街に合わないという理由で社会問題にもなった建物だ。ステンレスの外壁に強烈な夏の光が反射し、内部が回廊になっているだけに飛行船の格納庫のようで、京都のイメージからはかけ離れたものに見えた。確かに建築としての主張は強烈で、素材や形に興味を持つ者なら眺めずその場から立ち去ることは出来ないだろう。私はカメラを取り出して構えてみたものの、周りに余計なものが写りこみ写真にはならなかった。

東本願寺、西本願寺、清水寺は工事中だった。高さ３０ｍもある本堂は（平成の大修理、平成２０年完成）周囲に鉄骨を組みパネルで覆われ改修の真最中。説明パネルには工事の理由とその手順が写真・イラスト入りで丁寧に表示され、これも見逃せない貴重な資料に思えた。３～４千枚の屋根瓦にヒビが入り、そこから水が浸入し梁を腐らせ、通し柱にしみ込んだ水が冬に凍って割れ、結果として棟がわずかに傾き、そのすべてを修理するという。工事手順の細かな説明は経を読んでいるようで私には心地よかった。鎌倉時代に建てられた巨大な木造建築に鉄骨と金属パネル、クレーンやワイヤーが何ともアンバランスに見え、普段さほど寺や神社に興味を持たない私には現代ア

ートパフォーマンスを見ているようで大変興味深かった。囲われた明るいパネルに瞳孔が合わされているせいか、１４世紀の建造物はよけいに薄暗く汚れて見えた。周囲を鉄骨とパネルで囲い屋根も付いていることだし、修理が終わっても囲いや屋根をこのまま残せば二度と修理することなく永遠に保てるのではないかと思った。

営々と日本の文化を築いてきた京都は、今も、そしてこれからもその偉大な遺産の保護と修復、調査に多くのエネルギーを割き、新たな文化に手を出す余裕はないように見えた。街のどこを歩いても寺や神社とその関連商店が目につき、改めて寺の中に街があると実感し、人々の普段の生活も寺を巡る様々な行事、様式に関わり合いながら一年が過ぎて行くのだろうと思った。

この歴史と遺産に寄り添い、その中に居続け、そのありようをそのまま写真に記録して行く方が写真家の仕事としてずっと楽でやりやすいだろうと思った。京都を題材にして有名になった写真家はあまりにも多い。その代表的な写真家は土門拳、岩宮武二、入江泰吉らであろう。彼らは寺や神社に深く入り込み、建築物や仏像を通じて当時の精神性にせまる写真を制作してきている。しかし、歴史と偉大な遺産を背景にしながら、それとは違う別な価値を求め生み出すことはきっと大変なことに違いない。

ギャラリーイシスがコンテンポラリーやファインアートを掲げて登場し１１年になるが、その理念は京都人に受け入れられたのだろうか。３週間に渡る私の写真展の会期中ずっと気になっていた。オーナーの相川氏も若い写真家の集まりはあまりよくないと言っていた。

しかし、高松次郎の現代建築や京都駅のポストモダンな建築に古都京都の景観にそぐわないと言って、仏教会を巻き込んだ多くの論議があったにも関わらず建てられたことは、京都人の心の中にも新しさ、変化を求める気持ちがあることは充分に感じられた。だとすると一時代を風靡した寺や神社、仏像の写真に取って代わる京都人に受け入れられる写真の到来もそれほど遠くはないように思えるのだが。

三好耕三氏講演会

「８ｘ１０インチカメラの魅力と作品」

荒井崇

・会場：フォーラム横浜セミナールーム２

・日時：2004 年 2 月 29 日（日）15:00～17:00

2004 年研究会総会後、恒例の講演会が行われた。今年は写真家の三好耕三氏さんをお招きし、講演していただいた。

三好さんは、一貫して８ｘ１０インチカメラを駆使し、自ら現像プリントして長年作品を制作し続けており、写真作家活動一筋の方。中島先生曰く、「写真作家の見本のような人」である。

以前三好さんは、アリゾナ大学センター・フォー・クリエイティブ・フォトグラフィーで１年間研修後、引き続きアリゾナ州に滞在していたことがある。センター・フォー・クリエイティブ・フォトグラフィーとは、アンセル・アダムスのネガを収蔵していることで有名なところ。三好さんの片鱗がうかがえる。

もともと三好さんは幼少の頃、画家になりたかったという。しかしながら、絵を描いても納得できる作品を描けるのは１０回に２回程度。これでは無理と思ってあきらめたそうである。大学進学のとき、「机に向かって勉強する必要が無い」という理由で日大芸術学部を選択。そのとき知り合った田村さんという知人の影響で写真学科に入ったとのこと。卒業後はエドワード・ウェストンに影響を受け、とりあえず１０年をめどに、報道でない写真作家の道を進んでいく。１０年後初の個展を成功させ、結局写真作家活動がおもしろく感じ、それ以降もあくまで写真作家として続けている。

三好さんは露出計を使わないで撮影するという。理由は、「撮りたいときに撮れるから。」「露出計を使ったところで機械の誤差が大きいから露出計に頼らない。」とのこと。そして撮影カットは１枚のみ。JOBO を使ったフィルム現像はほとんど失敗が無いし、３年に１回は失敗するが、それは自分への戒めにするという。私たちとは全く異なる撮影スタイルであるが、それはそれで、三好さんにとって長年培ってきた最良のスタイルなのであろう。多分私たちにとってはゾーンシステムが最良のスタイルであるのと同様に。

写真を撮るのが好き。暗室作業が好き。暗室作業に至っては３日３晩コーヒーのみで過ごすこともできるそうだ。梅雨の時期は外で写真が撮れないので、むしろ落ち着いて暗室にこもることができるという。また、「写真を撮ることによって、その時代に形ある何かを残していくことができ

る。」これが三好さんにとって最も重要な原動力だようだ。私たちもこの辺のところを学ぶ必要があるのではないかと思った。

フィルムは一貫してトライＸ。いつでも安定した作品作りができるよう薬品は濃縮液を使用している。現像液はＨＣ１１０を１：７希釈、定着液はラピッドフィクサーとのこと。ラピッドフィクサーは、何と５ガロン単位で購入するそうだ。また、フィルム現像機はＪＯＢＯ。１リッターで８ｘ１０を５枚一気に現像する。ちなみにトライＸは昨年乳剤が変わったが、仕上がりの調子にそれほど影響は無かったという。印画紙はオリエンタルＧ又はＶＣが好み。ただし最近モデルチェンジしてしまい調子がイルフォードに似てしまったので、次に何を使うか現在考え中とのこと。確かにモデルチェンジしたオリエンタルはイルフォードのようにややウォームなので、ウォームが好みでない筆者も現在悩んでいるところだ。

講演の中で、三好さんは自身のオリジナルプリントを見せてくれた。以下はそのときの作品に関する三好さんのコメントである。

１．飛行場

アリゾナの小さな飛行場で撮影したシリーズ。アリゾナでは飛行機も無造作に屋外に置きっぱなしにしているという。乾燥しているので傷まないとのこと。アメリカには、飛行機を持つ人のための滑走路付き住宅（分譲地のようなもの）まであるそうだ。

２．ＣＡＣＴＩ（サボテン）

猛暑のアリゾナで撮影したサボテンのシリーズ。過去に温室の作品があるが、そこから派生したイメージだそうである。乾燥したアリゾナらしい情感をとらえる為、４０度を越える暑さの夏に撮影。凍らせたペットボトルが帰りには熱湯になっていたという。撮影場所は何と、私有地やインディアン居留地。また、ガラガラ蛇除けのための長靴や、カメラを高く構えるための脚立など装備も大変だ。更に高温下ではポラロイドの感度が約４段上がってしまうそうで、乳剤は粘度が極端に落ちてしまうという。

また、空を強調するフィルターを使ったり極端な焼きこみは行わない。あくまで望む条件のチャンスを狙って撮影するとのこと。

３．The Mother Road - Route66

アメリカの国道を撮影したシリーズ。
道の真中で国道を撮影したイメージが多いが、基本的には車が居なくなったときを見計らって撮影するという。最も、撮影が終わるまで待ってく

れた親切な車もいるらしい。

宿泊は街道沿いのモーテル。わざと古い安モーテルに泊まる。家族でやっているアットホームなモーテルもあり、そこの古い調度品はとても趣のある魅力的なものであるという。

そしてこの撮影も暑さとの戦い。フィルムホルダーは、絶対に車の中に置きっぱなしにはしない。食事に行くときも必ずフィルムホルダーを担いで店に入る。

最後に、三好さんの講演で最も印象的だった言葉がある。

「写真は現物を見ないとだめ。印刷で図柄はわかっても印画紙に込められたものを直に見ること。これが最も大切であり、例えアマチュアの作品でも同じことである。」

オリジナルプリントを見ることの大切さを痛感させられた講演会であった。

三好耕三氏　略歴

・1947 年　千葉県生まれ
・1971 年　日本大学芸術学部　写真学科卒業
・1991～96 年　文化庁芸術家在外研究員として アリゾナ大学センター・フォー・クリエイティブ・フォトグラフィーで１年間研修後、引き続きアリゾナ州に滞在。
・現在　東京を拠点に制作活動を続けている。

ゾーンシステム・テクニカルアドバイス

スロッシャーを使ってみて

中島秀雄

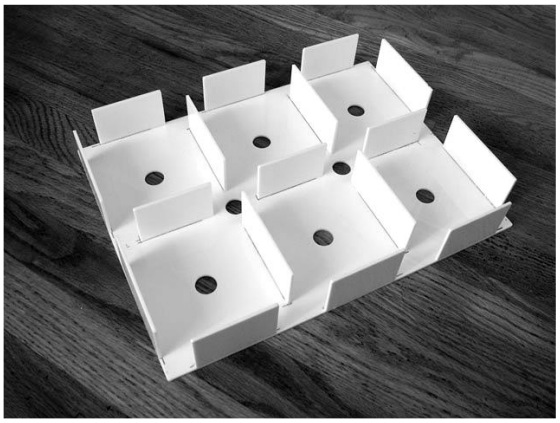
今まで様々な方法でシートフィルムの現像を試みてきた。皿現像、深タンク現像、小型タンク現像、最近ではトレイにピンを立て、６枚一度に現像して安定したネガを得ていた。しかし、接着剤が薬品によって劣化してピンが取れてしまい、新しい現像方法を模索していた。

会報に掲載された畑さんのジョン・セクストンワークショップ報告からスロッシャーを知り、早速ためしてみた。詳しい図面を送ってもらい、トレイサイズに合わせて修正した図面をもって近くのビーバートザンに出向きパーツにしてもらった。値段はアクリル板 2800 円、カット代 300 円位だったと思う。組みたてはアクリル接着液を注射器に入れ、接着面に注入するだけで簡単に組める。(写真参照)

フィルム現像は、現像液がフィルムに均一に流れることが理想であり、従来の攪拌方法では左右上下に液が流れるような方法で進めている。図面を見て興味をもったのは底板に 20mm 程の穴を開け、フィルムの背中（ベース面）から現像液が湧きあがってくる方式になっていることだ。下から湧きあがる方式は直接乳剤面に液が触れず、均等に攪拌されるかもしれないと考えた。明るい部屋で液の流れを確認するとゆっくり攪拌することで均一さが保てるものの、激しくやればかえって流れに荒れがでることがわかった。ジョン・セクストンはマイナス現像用にこのスロッシャーを使い、ゆっくり攪拌するという。

スロッシャーという所以はここからきている。

スロッシャーにフィルムをセットし、前浴、現像、停止、定着とフィルムに触れることなく進め



られ、フィルム同士の接触によるキズを防ぐことも出来る。また、停止や定着にスロッシャーごと入れることで、一枚一枚入れることによるムラ、すり傷も防ぐことができる。とにかく**水にぬれたフィルムは大変デリケートで、定着液で硬膜処理するまで触れないのがベターである。**攪拌は 10 秒に一回持ち上げる程度で進めたが、ジョン・セクストンは１分に一回程度のようだ。また、ラックのいくつかを空にしておいてマイナス現像用フィルムを現像途中に入れることも可能だ。ただし、次の現像のために本体を完全に洗浄し乾燥するまでまたなければならず、これが少し厄介でもある。もう一台作っておくと効率はよくなる。

感度テスト

現像液は今までのものを使い、フィルムの感度、現像時間テストを行った結果、感度は 200 と 160 の中間の値で、今までの感度とそれほど大きな変化はなかった。

皆さんも色々試してみるといいでしょう。その場合、感度テストと現像時間テストはお忘れなく。

静物撮影会報告

荒井崇

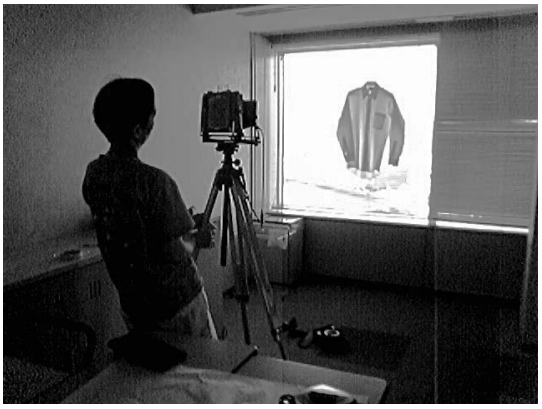
・日時：２００４年7月１７日（土）
・場所：横浜ランドマークタワー１３Ｆフォーラムよこはまセミナールーム
・参加者：中島先生、畑、北野、松本、田中（英）、石井、荒井、小野

今回の静物撮影テーマは、箱／衣服／ハンガー／食器等。今回も３箇所にセッティングして撮影。２箇所は窓からの自然光、残りの１箇所はフラッドランプを使用した。以下主な撮影の様子を紹介する。

１．箱

箱は中島先生に準備していただいた組み立て式の白い紙製のものを使用。都市空間をイメージして配列。まず縦のラインが垂直になうよう水準器でカメラボディ位置を合わせてからフォール。横のラインは水平方向にパンニングして合わせるが、机のへりを目印に合わせるのがポイント。中島先生による実践さながらの指導は、いつも私たちにいくつかの新しい撮影方法や表現を与えてくれる。

箱の置き方も注意が必要。箱の底が平で無い場合、底に薄い紙などを入れて傾きを調整する。ライティングはサイドからトレペを介してフラッドランプによりディフューズ。影の様子を見ながら調整する。



２．畳んだワイシャツ

自然光にて畳んだワイシャツを撮影。ワイシャツのハイライトをゾーンⅦとすると、バックのシャドーがゾーンⅠになってしまった。トレペ越しに弱い人工光を入れることにする。これでシャドーがゾーンⅢとなり、ディティールを確保できた。

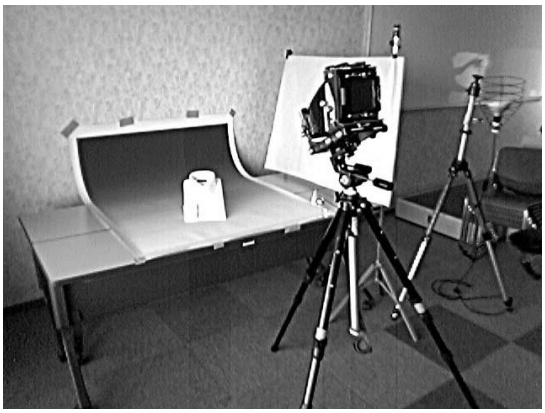
ワイシャツのディティールとシャドーの両立、ワイシャツの配列をどうするか。ここが撮影のポイントだった。

３．窓越しのワイシャツ

窓越しに、ハンガーにかけたワイシャツを逆光撮影。背景をゾーンⅧ、ワイシャツハイライトをゾーンⅥ、ワイシャツシャドーがゾーンⅣとなる条件。桜木町の港をバックにうまく取り込むのがポイント。絞りをめいっぱい絞るか、少し開けるか、バックの処理は撮影者次第である。

その他ワイドにして、小物を添えたイメージも撮影。ワイシャツの透過光をどう生かすかが撮影者の力量。

その他の被写体として、ハンガーや食器にもトライし、充実した撮影会が進められた。中島先生の指導により、今までのまちがったライティング



やカメラセッティングを再認識し、自分の知らなかった技術や表現方法を発見／習得する良い機会となった。

ｿﾞｰﾝｼｽﾃﾑ研究会定例会日誌

2004年7月3日（土）　　記録：畑文夫

・出席者：中島先生、松本、古川、田中肇、田中英司、畑、圓子、北野、石井、山本、古谷津、岡崎、木下、山下

・作品持参者：古川、松本、古谷津、木下、岡崎、北野、畑、田中英

■役員会　１１時～

□ゾーンシステムワークショップ

９月頃　ヒットオンで計画中

撮影、暗室、仕上げ

（土日　計６回　定員１５人程度　５万円？）

対象（準会員）は、橘田氏のみ

・会費は全員から納入を確認した　３６人（休会約９人）　収入大幅減

・ＨＰの件

青、茶色帯を削除した修正案あり。さらに追加修正を行ってから公開する

・ゾーンスケール　０～Ⅸまで

・ギャラリーの作品には白枠つける

・田中英司氏のコメントを復帰する

・ゾーンシステムの解説は古谷津氏の添削による（古川氏からＭａｃで見え方が異なる指摘あり）

・当面は畑が契約しているプロバイダを利用する（月額５００円）

・静物撮影会　７月１７日　９～５時

最低３人×３グループとしたい

被写体

１　衣料（ワイシャツ、Ｔシャツ...）

２　箱の構成（積み木イメージ）

３　調理器具など（前回の撮影会で使用したもの）

参加者の用意：ポラロイド、および追加の被写体（箱、アンティーク玩具など）

・菅野さん　体調すぐれず、しばらくお休み

■例会　１３時～

・写真展候補作について

今回までに未定の人は８月例会持参、又は８月中に中島先生宛郵送のこと

写真展　１１月中旬　青山を仮予約

・暗室ワーク日程

８月１日（日）　工芸大暗室

・８月例会　８月１４日（土）

・ポートレート撮影会

８月２８又は２９日計画中

2004年 8月14日（土）　　記録：荒井崇

・出席者：中島先生、北野、橘田、古谷津、松本、菊池、畑、荒井、田中（肇）、圓子、石井、岡崎

・作品持参者：北野、古谷津、橘田、荒井、松本、石井、菊池

・中島先生の京都写真展（ギャラリーイシス）レクチャーでは、約３０人が参加した。

・京都のギャラリーイシスより、ゾーンシステム研究会として写真展をやって欲しいと要請あり。今後費用も含めて可能かどうか検討する。またギャラリーイシスは、将来アダムスの写真展もやりたいとのこと。

・「アンセルアダムスの世界を極める」（マイケル・アダムスと親交の深い吉田氏企画のツアー）が、人数不足で中止になってしまった。

・上記吉田さんの事務所見学を検討中。（詳細は後日連絡。）

・来年、海外撮影会としてカリフォルニアのポイントロボス、カーメルを企画したい。（アダムスの暗室見学も含めて考えたい。）JTB より、ぜひツアーを企画させて欲しいと言われている。
・写真展日程は 11 月 18 日（木）－23 日（火・祝）。場所は昨年と同じｱｰﾄﾌﾟﾗﾝﾆﾝｸﾞﾙｰﾑ青山。
・写真展額装はブックマットに変更。額装時のプリントたわみ防止のため、バックボード中央を押さえる等の工夫を検討してみる。
・写真展プレス用写真は、９月１０日までに準備。（中島先生に選定してもらい、選ばれた人は 5x7（キャビネ）にプリントして提出）
・暗室ワークは参加希望者少数のため中止になってしまった。再度希望者を募って企画したい。
・人物撮影会を１０月以降に企画したい。モデルは先生の知人ベネズエラ女性を交渉中。
・暑いシーズンには、２４度で処理可能なオリトーンがお勧め。
・インターネットに載っている USA 以下２作家が紹介された。
  ・SUSAN HARLIN　（８ｘ２０で撮影する女性写真家）（中島先生紹介）
  ・CLYDE BUTCHER （沼に入って撮影するフロリダの写真家）（松本さん紹介）

2004年9月4日（土）　　記録：荒井崇

・出席者：中島先生、北野、木下、松本、畑、荒井、田中（肇）、岡崎、小野、田中（英）
・作品持参者：小野、田中（英）、菊池（送付）、藤枝（送付）

・菅野さんが体調不良でしばらく休むため、幹事長の代行を小野さんにお願いする。
・カルメットにて旧タイプトライ X 及びオリエンタル印画紙がまだ売られている。希望者を募って中島先生がまとめて注文する。
・プレエクスポージャーとは、乳白色樹脂をレンズの前におき、被写体に向けて事前に露光する技法。マイナス現像と同様の効果が得られる。アダムスは、例えばゾーン２相当の露光をしていたという。（中島先生談）
・写真展関連
  ・１１月１８日（木）～２３日（火・祝）　を予約済み（アートプランニングルーム青山）
  ・出品作のセレクトは９月第二週に中島先生が決定し、事務局経由で連絡する。
  ・またＤＭ、広報用写真（キャビネ）も、至急決定し、該当者に連絡する。（９月１０日締切り）
  ・現在までに作品を提出した人は約１５～６人。３０点は展示したいので、あと数名参加を募る。（事務局から呼びかけ）
  ・最終プリントは次回例会（１０月３日）に持参、或いは先生宛郵送のこと。
  ・写真展額装時の印画紙波うち対策。フレームの裏へ中央部押し付け部材を検討する。（荒井が検討。）
  ・DM 及び広報用プリントは、中島先生がセレクトし、畑さん経由で会員へ連絡し、キャビネに焼いてもらう。
  ・スポッティング、額装などの日程
    １０月３０日（土）　スポッティング（およびＤＭ宛名書き？）
    １１月７日（日）　額装
    １１月１３日（土）　予備日
  いずれも場所は反町工房（田中英司氏倉庫内）
  横浜市神奈川区反町
  （東急東横線　反町駅下車３分　電話無し）

・写真展出展候補作品は、次回例会（１０月３日）プリントして提出。

・セレニウム調色に関して、セレニウムトナーとハイポクリヤリングエージェントの混合液により、水洗促進処理と調色を一気に済ませる方法を中島先生より紹介された。

【処理方法】（後日いただいた資料より）

調色液とハイポ駆除液の混合液を作るには、天秤測りと正確なメスシリンダーが必要になり、アルカリバランスをとるためにメタ硼酸ソーダが必要になる。

＜調合方法(すべて銀一で購入可能・印鑑必要)＞

ハイポクリヤリングエージェント液　3800cc
ラピッドセレニウムトナー　200cc
コダルク　（メタ硼酸ソーダ）　75g

＜処理＞

23℃　3～5 分

8x10 印画紙 50 枚程度で、必要量取出し使用後は捨てる。定着の終わったプリントを軽く水ですすぎ、混合液の中に入れ攪拌する。時間が来たら取り出し、水ですすぎ、最終水洗に進む。

なお、この処理は、最低でも水洗促進処理に必要な時間（３分）は必要。この時間より短く処理して調色を押さえたい場合は使えないので要注意。

2004年10月3日(日)　　記録：荒井崇

・出席者：中島先生、北野、木下、松本、畑、荒井、田中（肇）、岡崎、小野、小谷津、藤枝、石井、橘田、岡崎

・作品持参者：田中（肇）、小野、菊池（送付）、藤枝、橘田、古川、木下、石井、松本、畑、岡崎、小谷津

・写真展 DM は枚数を減らし、（２０００枚とする）印刷費を削減する。

・雑誌掲載用案内は、主要なところへ一通り送付済み。（中島先生発送）

・ゾーンⅥの印画紙「ブリリアント」（冷黒調）はなかなか良いとのこと。（中島先生談）

・写真展 DM 発送に関して、原則的に休会者には発送する。また、脱退者にはわかる範囲で発送。

・新トライ X は、相反不軌がかなり大きいので注意。富士のアクロスは非常に少ないとの情報があった。

・写真展額装の波うち対策として、バックボードとブックマットの間に、イメージサイズのスペーサーを入れると中央部が押されて効果有り。また、スペーサーは、マットの窓をカットしたものを使用すれば有効利用でき、コストはかからない。（荒井が試作フレームを提示）

・写真展用プリントサイズに関して、できる人は半切で伸ばしてもらう。
（最近半切サイズの印画紙が減ってしまったが、メーカーによっては１２ｘ１６（半切よりやや小さい）というイレギュラーなサイズもある。半切が手に入らない場合、これを使っても良いとのこと。）

・本日は、写真展が近いこともあり、候補作のプリント指導を中島先生に行っていただいた。その中で一部候補作品の追加、削減も行われた。

・次回は、１０月３０日（土）田中（英）さん倉庫にてスポッティング。それまでに展覧会本番プリントを仕上げて当日持参するか、中島先生に送ること。

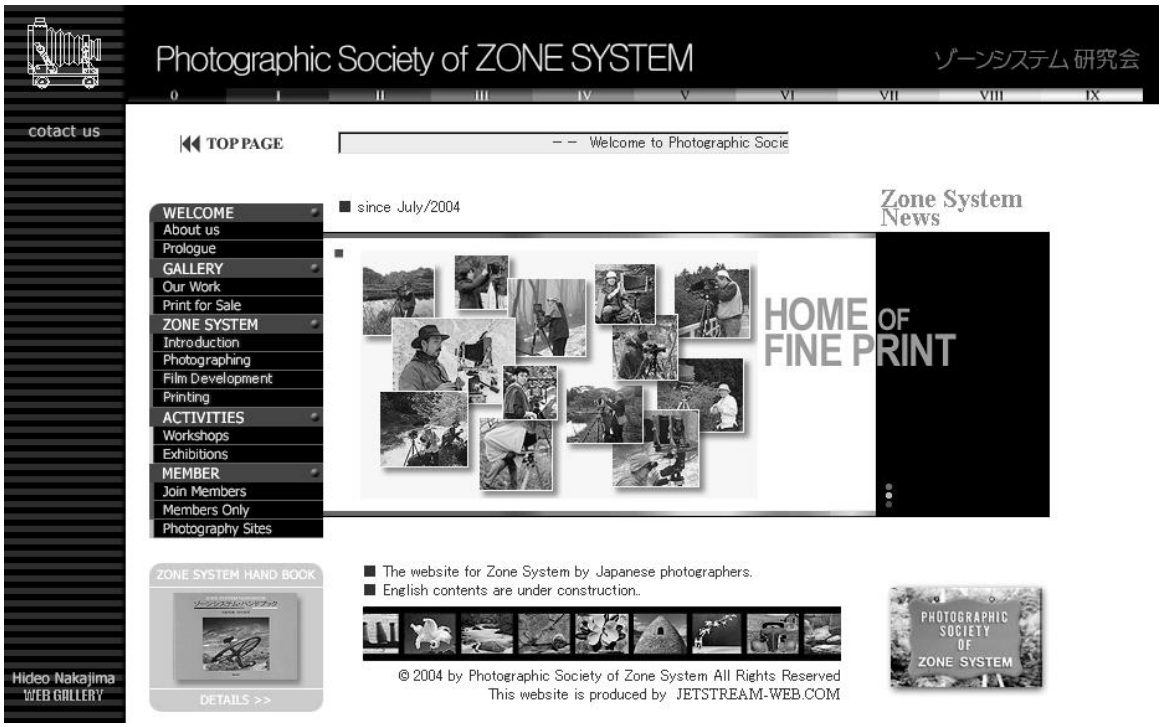
Information

【トピックス】

ゾーンシステム研究会ホームページ

ゾーンシステム研究会のホームページがリリースされました。ぜひ頻繁にチェックしてください。

http://hw001.gate01.com/zonesystem/



カーメル撮影会

２００５年６月頃、カーメル撮影会を計画しています。カーメルは、サンフランシスコから南へ海岸沿いに下りた場所に位置する、美しい芸術家の多い町で、アダムスやウェストン所縁の場所です。

ウェストンが撮影して有名なポイント・ロボスでの撮影会や、アダムスの暗室見学等を計画しています。ぜひ奮ってご参加ください。

【売ります】

中島秀雄

・トライＸ新タイプ（４ｘ５）

50 枚入り 2 箱有り　2004 年 10 月購入品。

（１箱のみの購入でも結構です。）

ヨドバシ購入価格より少し安い価格です。

（ポイント換算して）

１箱につき 4900 円

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。

２．手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。

・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力します。）

・パソコンの電子メール

・ウィンドウズの Word2000

・text ファイル

（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2000 で作成しています。）

ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

パソコンの扱いが不慣れのため、時々ご迷惑をおかけするときがあるかと思いますので、その際はよろしく御指導ください。

［編集部］　荒井　崇